

1 以下の問いに答えよ。(10点) (1)～(5)は各一点、6は各二点、7は各三点、8は各四点、9は各五点、10は各六点、11は各七点、12は各八点

1 次の動詞を [] 内の活用形に改めよ。(動詞も合めて解答すること)

① 儲る [未然形] ② 蹴る [命令形] ③ 悔ゆ [連用形] ④ 経 [已然形]

2 次の⑤・⑥のそれぞれの中で、活用の種類が他と一つだけ異なる動詞をそれぞれ抜き出せ。

⑤ 旅す 愛す 死す 選す 念す 軽んず ⑥ 居る 飲る 射る 干る 率る 試みる

3 次の [] 内の活用形をそれぞれ答えよ。 [] 未だ形・連用形・終止形……

◆ この苗の ① 枯れ ② ぬきき ③ 種まき ④ ぬき

4 次の [] 内の基本形(終止形)になつてゐる。文に合うように適切な形に改めよ。(動詞も合めて解答すること)

◇ 大田、これ ① 見る ② たまふ ③ 見る ④ 見る ⑤ 見る

5 次の [] 内を基本形(終止形)に改めよ。(動詞も合めて解答すること)

◇ 風の音 ① 聞こえ ② 聞こえ ③ 聞こえ ④ 聞こえ ⑤ 聞こえ

6 次の古語の活用表を完成させなさい。なお、活用の種類は省略形で答えよ。 [] 上・ラ変 [] 二点×四問

⑬ 越ゆ ⑭ 越ゆ ⑮ 恨む ⑯ 去ぬ

【1】 次の文章を読んで、以下の問いに答えよ。(10点) (1)は計五点、2は各一点、3・12は各二点

これも今は昔、絵師良秀といふありけり。家の隣より火出でて来て、風おしおほひてせめけれ。《は》逃げ出でて、大路へ出でにけり。人の描かする仏も 《おはし》にけり。また、衣着ぬ妻子なども、さながら内にありけり。それも知らず、3 ただ逃げ出でたるを 《おはし》に、向かひのつらに立ちてり。

見れい 《は》すてにわが家に 移りて、煙・炎くゆりけるまで、おほかた、向かひのつらに立ちて、4 眺めければ、「あさましきこと」とて、人ども来とぶらひけれど、b さわがす。「うかに」と人言ひければ、向かひに立ちて、家の焼くるを見て、うちうなづきて、時々笑ひけり。「あはれ、しつる 5 せうとくかな。年ころはわるく書きけるものかな。」と云ふときに、とぶらひに来たる者ども、「こはいかに、6 かくては立ちたまへるぞ。7 あさましきこと」かな。ものつきたまへるか、「と云ひけれう 《は》、」なんてふものつくへきぞ。年ころ、不動尊の火災をあしく描きけるなり。今見れば、かう ③「こそ」燃えけれど、心得つるなり。これこそせうとくよ。8 道のを立てて世にあらむには、仏だによく書きたてまつり 《は》、百千の家も出で来なむ。9 わたうたちこそ、させる能おはせねオ 《は》、ものをも ④ 惜しみたまへ、と云ひて、10 あさましきことぞ立てりけれ。

そのうちに、良秀がよぢり不動とて、今に人々 11 めで合へり。

1 以下の問いに答えよ。(五問) [] 知技

① 本文が収められている書物の題名を漢字で答えよ。(二点)

② おはし [] の意味を答えよ。(二点)

③ 「こそ」の結びの語はどれか。本文中から一語(単語一つ)を抜き出せ。(二点)

④ 本文中の「ア 《は》、」オ 《は》」の中に他と用法が異なるものが一つだけある。その一つを記号で答えよ。(二点)

2 a 移り・ b さわがす・ c 惜しみ の主語はそれぞれ何か。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。(一点×三問) ア 妻子 イ 仏 ウ とぶらひに来たる者ども エ 良秀 オ 火 カ 作者(語り手) キ 家 【思判表】

3 ただ逃げ出でたるを《おはし》に、の時の良秀の心境はどのようなものか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。【思判表】

ア 自分だけが慌てて逃げ出したことを恥じている。 ① 自分だけが逃げ出したことにもつらさを感じている。 ウ 大切な仏像を忘れて逃げ出したことを痛んでいる。 エ 妻子を見捨てて一人逃げ出したことを後悔している。

4 この話の結末から考えて、良秀が 4 眺めているものは、何か。本文中から一語(単語一つ)で抜き出せ。【思判表】

5 せうとく(もうけもの)とは、具体的にどのようなことをさすか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。【思判表】

ア 火事に遭つて名前に執着するおろかさがあったこと。 エ 事に遭つて絵画など無用であることがわかったこと。 ウ 火事の際に火がどのように燃えるかがわかったこと。 エ 火事に遭つたにも関わらず多くの仏像を持ち出せたこと。

6 かくては、良秀のどのような行動をさしているか。【思判表】

7 あさましきことについて、① の場面での意味として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。【思判表】

ア みつともないこと イ 情けないこと ウ いやしいこと エ 悲しいこと カ みすぼらしいこと ② あきれたこと

② 何に対して言ったのか。【思判表】

8 この道とは何の道か。本文中から三文字で抜き出せ。【思判表】

9 わたうたちは、何をしに来たのか。本文中から一語(単語一つ)で抜き出せ。【思判表】

10 あさましきことぞ立てりけれについて、良秀はなぜこういう反応を示したのか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。

ア 問にかけてきた人々の考えを平凡だと感じたから。 イ 焼け出された人々が右往左往するさまがおかしかったから。 ウ 他人の描く不動尊がつたないものとわかったから。 エ すべてを失つてかえつて心の中がすがすがしかったから。

11 めで合へりの口語訳として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。【思判表】

ア 今に人々もほめるようになる。 イ 今や人々は目を見合わせて驚いている。 ウ 今では人々が誰で合っている。 エ 今に至るまで人々が称賛し合っている。

12 この話の鑑賞文として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。【思判表】

ア 不動尊の背後の火災は人を狂わせるほどの不思議な力がある。 イ 芸道に徹した者の自己中心的な行動を冷笑的に描き出している。 ウ 芸道に精通する者の狂おしいほどの熱心が描き出されている。 エ 芸術家といえども地獄の沙汰も金次第であると風刺している。

【1】以下の問いに答えよ。(十五点各一点)【知技】

1 次の【 】内の読みをひらがなで答えよ。問題集4巻

- ①【是正】 ②【水稻】 ③【海浜】 ④【荳】

2 次の【 】内を適切な漢字に改めよ。問題集4巻

- ①【ぜんと】洋々たる若者 ②【みんよう】を嘆く
- ③【仕事に】じりりよくする ④【ばんじゃく】に守りを固める
- ⑤【駈路を】かいたくする ⑥【油は水に】とけな
- ⑦【ぜんぶく】の價額を置く ⑧【内閣の】じんようを一斬する
- ⑨【晴丹を】ほうじゅする ⑩【こたん】な風風の絵 ⑪【期日が】せつぱくしてゐる

【2】次の文章を読んで、以下の問いに答えよ。(三十五点) 「羅生門」芥川龍之介

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗りの刺げた、大きな田柱に、きりぎりすが一匹とまっていた。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や袴烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

なぜかというところ、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう①「災」いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひとりでではない。5 日記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていったといふことである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよこにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいに、引き取り手のない死人を、この門へ持って来て、捨てていくという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みしないことになってしまったのである。

そのかわりまたからすがどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、そのからすが、何羽となく輪を描いて、高い脚尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。ことに門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それがごまをまいたように、はつきり見えた。からすが、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついでに來るものである。——もつとも今日は、制限が過ぎたが、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い車の生えた石段の上に、からすの糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襦袢を握って、右の頬にできた、大きな②「疔」を気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。

作者もさつき、下人が雨やみを待っていた。と書いた。しかし、下人は雨がやんで、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町はひとりでさびれていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と言われても「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた」と言わなければならない。そのうえ、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人のSenjimon(羅生門)に影響した。申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何をかきかきして明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならぬことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

6 雨は、羅生門を包んで、遠くから、さあさあとうとう音を響かす。夕間ははじけだして空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した葉の先へ、またまた雨の雲を支えて、さあさあ、

どうにもならぬことを、どうにかするために、手段を選んでいようとまはしない。選んでいれば、糞地の下か、道端の土の上で、飢え死にするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、大のように捨てられ、さつきから、選ばないといすれば、

1 下人の考えは、何度と同じ道を低回したあげく、やつとこの局所へ達着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないといふことを肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるため、当然、

そのあとに來るべき「盗人になるよりほかにしかたがない」といふことを、積極的に肯定するだけの、勇氣が出すにいたるのである。下人は、大きなさめを、それから、大體そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕間とともに遠慮なく、吹き抜ける。丹塗りの柱にたまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行つてしまった。下人は、首を縮めながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襦袢を高くして、門の周りを見回した。雨風の寒えのない、人目にかかる恐れのない、一晩寒に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の樓へ上る幅の広い、これも丹を塗つたはしが目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の②「太刀」が鞘走らないように気をつけながら、わら草履を履いた足を、そのはしこのいちばん下の段へ踏みかけた。

それから、何分かのちである。羅生門の樓の上へ出る、幅の広いはしの中段に、一人の男が、猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。樓の上から差す火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみを持った③「鬚」のある顔である。下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだたかきくつていた。それがはしを二、三段上つてみると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこそこ、動かしてゐるらしい。これは、その通つた、黄色い光が、隅々にくもの果をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すべにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をとぼしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、やもりのように足音を盗んで、やつと急なはしを、いちばん上の段まで這うようにして上つてみた。そうして体をできるだけ、平らにしながら、首をできるだけ、前へ出して、恐る恐る、樓の内をのぞいてみた。

見ると、樓の内には、うわさに聞いたとおり、いくつかの死骸が、無造作に捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思つたより狭いので、数はいくつともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるといふことである。もちろん、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸はみな、それが、かつて、生きていた人間だといふ事実さえ疑われるほど、土をこねて造つた人形のように、口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上に転がっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光を受けて、低くなつてゐる部分の影をいつそう暗くしながら、永久におしのことく黙つていた。

下人は、それらの死骸の腐亂した臭氣に思わず、鼻を覆つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆つことを忘れていた。7 ある強い感情が、ほとんどことここの男の嗅覚を奪つてしまつたからである。

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中に入らずにまわつてゐる人間を見た。膚皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木切れを持って、その死骸の一つの顔をのぞき込むように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心と動かされて、③「暫時」は息をするのをさへ忘れていた。日記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木切れを、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちよつと、猿の親が猿の子のしらみを取るように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。髪は手に従つて抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。——いや、この老婆に対すると言つては、語弊があるかもしれない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。このとき、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へていた、飢え死にするか盗人になるかという問題を、改めて持ち出したら、おそらく8 下人は、なんの未練もなく、飢え死を選んだことである。

下人には、もちろん、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がり出していたのである。下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。したがつて、合理的には、それを善悪のいすれに片づけてよいかわらなかつた。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くといふことが、それだけですべて許すべからざる悪であつた。もちろん、下人は、さつきまで、自分が、盗人になる気だつたことなどは、とうに忘れてゐるのである。そこで、下人は、両足を力を入れて、いきなり、はしから上へ飛び上がった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大殿に老婆の前へ歩み寄つた。老婆が驚いたのは言つてもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで尊にでもはじかれたように、飛び上がった。

「おのれ、どへ行く。」

下人は、老婆が死骸に近づきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手を塞いで、こう罵つた。老婆は、それでも下人を突きつけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押し戻す。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。

下人は、老婆が死骸に近づきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手を塞いで、こう罵つた。老婆は、それでも下人を突きつけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押し戻す。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。

下人は、老婆が死骸に近づきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手を塞いで、こう罵つた。老婆は、それでも下人を突きつけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押し戻す。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。

しかし勝敗は、初めから、わかっている。下人はとうとう、老婆の胸をつかんで、無理にそこへねじ倒した。ちょうど、鶏の脚のよう、骨と皮ばかりの胸である。

「何をしていた、言え、言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘を抜いて、白い鋼の色を、その目の前へ突きつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわな震わせて、肩で息を切りながら、目を、眼珠がまぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、おしのように執拗く黙っている。これを見ると、下人は初めて明白に、この老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、今まで険しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。あとに残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就したときの、9 安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下ろしながら、少し声を和らげてこう言った。

「俺は検非違使の斤の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからおまえに縛をかけて、どうしようというようなことはない。ただ、今時分、この門の上で、何をしていたのか、それを俺に話させようではないか。」

すると、老婆は、見開いていた目を、いつそう大きくして、じつと下人の顔を見守った。まぶたの赤くなった、肉食鳥のような鋭い目を見たのである。それから、しわで、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でもかんでいるように、動かした。細い喉で、とがった喉ぼとけの動いているのが見える。そのとき、その喉から、からすの鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝わってきた。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思つたのじゃ。」

下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷ややかな「侮蔑」といっしよに、心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜けば毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口もりながら、こんなことを言った。

「なるほどな、死人の髪を抜くということとは、なんぼう悪いことかもしれぬ。じゃが、ここに居る死人どもは、みな、そのくらし魚だと言つて、太刀帯の陣へ死に往んだわ。疫病にかかって死ななんだ。今でも死に往んでいたことである。それもよ、この女の光る干し魚は、味がよくて、太刀帯どもが、欠かさず材料に買つていたぞよ。わしは、この女のしたことが悪いとは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にするのじゃ、しかたがなくしたことである。されば、今また、わしのしたことも悪いとは思わぬぞよ。知つていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるのである。」

老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。

下人は、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きな11「にきび」を気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いてるうちに、下人の心には、10 ある勇氣が生まれてきた。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさつきこの門の上へ上がつて、この老婆を捕らえたときの勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、飢え死にするか盗人になるかに迷わなかったばかりではない。そのとき、この男の心持ちから言へば、飢え死になどということとは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。

「さつと、そうか。」

老婆の話が終わると、下人は囁くような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を11「にきび」から離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

「では、俺が引刺ぎをしようと思つた。俺もそうしなければ、飢え死にする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の襟髪を刺ぎ取った。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしこの口までは、わずかに五歩を数えるばかりである。下人は、刺ぎ取った楕円色の襟髪を抱えて、またたく間に急なはしを12夜の庭へ駆け下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それから間もなくのことである。老婆は、つぶやくような、うめくような声をたてながら、まだ燃えている火の光を頼りに、はしこの口まで、這つていった。そうして、そこか、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞき込んだ。外には、ただ、黒洞たる夜があるばかりである。下人の行方は、誰も知らない。

1 ①「災」・②「太刀」・③「暫時」・④「侮蔑」の読みをひらがなでそれぞれ答えよ。(一点×四問)【知技】

2 本文の作者が著した小説ではないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。(二点)【知技】
ア 河童 イ 鼻 ウ 戯作三昧 エ 蜜柑 オ 杜子春 カ 蜘蛛の糸 (キ) 舞姫

3 本文の作者が著した小説ではないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。(二点)【知技】
ア 電車 イ 明暗 ウ 大導寺信輔の半生 エ 地獄変 オ 侏儒の言葉 カ 孝教人の死 キ トロロコ

4 本文の作者が著した小説を次の中から一つ選び、記号で答えよ。(二点)【知技】
ア 父帰る イ 坊つちゃん ウ 暗夜行路 エ にこりえ オ 伊豆の踊子 カ 人間失格 (キ) 芋粥

5 旧記によるとから始まる一文は、どういふことを示しているか、詳しく説明せよ。(三点)【思義判】

6 雨は、羅生門を包んで、……雲を支えている。という描写には、どのような効果があるか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。(二点)【思義判】
ア 雨がだんだんひどくなり、あたりが暗くなっていく様子を強調する効果。
イ 空模様と同様に、下人の心情も、暗く重苦しいものであることを暗示する効果。
ウ 人々の心が悲観的になってしまひ、生きる氣力を失つたことを象徴的に表す効果。
エ 羅生門の情景描写を間にはさまむことで、下人の視点を離れて客観的に状況を描き出す効果。
オ 平安時代という時代が、暗くじめじめしていた時代であると思わせる効果。

7 ある強い感情は、この部分以後でどのように言い換えられているか。本文中から十五字以内で抜き出せ。(三点)【思義判】

8 下人は、なんの未練もなく、飢え死にを選んだことであるが、下人に「飢え死に」を選ばせる感情とは、どのような感情か。本文中から十字程度で抜き出せ。(三)【思義判】

9 安らかな得意と満足とは、この場合どのようなことに対する満足か。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。(二)【思義判】
ア 怪しい老婆をたやすく取り押さえたことに対する満足感。 イ 老婆が何をしていたか明白になったことに対する満足感。
ウ 老婆の生死を左右することができることにに対する満足感。 エ 老婆よりも自分のほうが幸であることにに対する満足感。

10 ある勇氣とは、どのような勇氣か。本文中の語句を用いて、九字以内で答えよ。(三)【思義判】

11 この小説において11「にきび」(四)は、若さのほかに何の象徴となっているか、一語(重箱一つ)で答えよ。なお、本文中に無い語でも構わない。(三)【思義判】

12 夜の底は何を象徴しているか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。(三)【思義判】
ア 生きることの醜さに対する嫌悪感。 イ 平安時代の終末。 ウ 盗人となった下人に対してやがて下される罰。
エ 悪人が行きつくであろう地獄の苦しみ。 オ 暗く絶望的な人生。

13 この小説は、下人を通して何を語ろうとしたのか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。(三)【思義判】
ア 下人の行為を悪と断定することで説明できる、勧善懲悪(善を勧め悪を懲らしめる)の教え。
イ 極限的な状況の中で揺らいでしまふ、人間の倫理観の不確かさ。
ウ 仏法のご利益が通用しなくなった社会に垣間見える、末法思想(仏教が衰えて世の中が乱れる時代になるという考え)。
エ 社会一般に通用する権威や真理を否定する、ニヒリズム(虚無主義) 既成のもの全てを否定する「影射力」。
オ ささまな局面で変化してしまふ、青年期の自我意識の脆(ぜい)弱さ。

表 言語文化 一学期期末考査 解答用紙

二〇二三年七月七日(木) 第一校時実施

一年三・五・七組 番氏名

技	知
25	得
50	点

【I】《○点(1,5は各一点, 6は各二点)》

改行幅 57

1	① から	② けよ	③ くい	④ ふれ
2	⑤ 混ざ	⑥ 散る	⑦ 未然形	⑧ 未然形
4	⑨ 見	⑩ たまひ	5 ⑪ 老ゆ	⑫ 聞こゆ

6	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	行	活用の種類
⑩	去ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ	ナ	ナ変
⑪	越ゆ	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ	ヤ	下二
⑫	恥づ	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ	ダ	上二
⑬	恨む	み	み	む	むる	むれ	みよ	マ	上二
⑭	去ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ	ナ	ナ変

【II】《○点(1は計五点, 2は各一点, 3,12は各二点)》

1	① 宇治拾遺物語	② いらっしやる	③ けれ	④ エ
---	----------	----------	------	-----

2	a 才	b エ	c ウ
3	イ	炎	ウ
4			
5			
6	わが家が焼けるのを見て、うなずいたり、笑ったりしている行動。		
7	① キ	② 火事が出て、良秀の家にまで燃え広がりましたこと。	
8	絵仏師		
9	どぶらひ		
10	ア		
11	エ		
12	ウ		

判	思
25	

現代の国語 一学期期末考査 解答用紙

二〇二三年七月七日(木)第一校時実施

一年三・五・七組 番氏名

【I】《三十五点(各一点)》

改行幅 8B

技	知	25	得	50	1	① せいせい	2	① 前途	⑤ 開拓	⑨ 傍受
	知				② すいとう	② 民謡	⑤ 溶ける	⑩ 枯淡		
技	知	25	得	50	③ かいひん	③ 尽力	⑦ 全幅	⑦ 陣容	⑧ 盤石	⑩ 切迫
知	知	25	得	50	④ ほまま	④ ほんま	④ ぜんじ	④ ばんごう		

【I】《三十五点》

1	① わざわい	② たち	③ ざんじ	④ ばんごう
2	キ	イ	キ	25
3				思
判				25

5	日常敬つていた仏教に係わるものを壊すほど生活が逼迫しており、社会だ けでなく人々の心も荒んでしまったことを示している。			
6	イ	7 六分の恐怖と四分の好奇心	8	あらゆる悪に対する反感
9			ア	
10	盗人になる勇氣			
11	迷い・優柔不断さ			
12	才			
13	イ			